小説・翻訳

永松（ながまつ） 定（さだむ）

萩市・山口市

（1904～1985）

【著作】

『万有引力』（昭和12・協和書院）

『人間は美しい矛盾の動物』（昭和33・日本談義社）

【翻訳】

『ユリシーズ』共訳 ジェイムズ・ジョイス著

（昭和6・第一書房）

ほか

萩市立萩図書館 ☎0838-25-6355

永松 定は、昭和期の小説家で翻訳家、大学で教鞭をとった英文学者でもある。

明治三十七年（一九〇四）、熊本県玉名郡菊水町（現・和水町）に素封家で開業医の次男として生まれ、旧制第五高等学校から東京帝国大学文学部に進み、昭和三年（一九二八）に卒業した。在学中から上林暁ら友人たちと同人誌『風車』を拠点に創作活動に邁進した。

またジェイムズ・ジョイスやポール・ジョルダン・スミスなど英文学作品の翻訳と研究に取り組み、昭和八年（一九三三）、同人仲間の伊藤整、辻野久憲とジョイスの『ユリシーズ』を共訳し、また『ダブリンの人々』『万有引力』『ロレンス芸術論』などを次々に出版した。

永松は、同人仲間のほか井伏鱒二や浅見淵、古谷綱武、小田嶽夫ら気鋭の作家たちと交流し、『新潮』の編集者楢崎勤とは親交を重ね、『新潮』に評論を定期的に発表した。この時期は、永松の充実した発展期であった。しかし、昭和十二年（一九三七）、上海への取材旅行の後、強烈な神経衰弱に陥り、さらに郷里の母の大病などで精神的窮地に追い込まれ、逃避行のように帰郷した。

昭和十五年（一九四〇）、母の死を機に心機一転、友人の世話で山口県立山口中学校、次いで萩中学校の英語教師となり、戦中、戦後の混乱期を山口市や萩市で過ごした。永松にとってやまぐちの生活は、新鮮な驚きの連続だったとし、その経験を小説「田舎ずまひ」「萩の独楽廻し」「波の音」等に表現した。自身を投影した主人公は、人々の生活には藩政時代の風習が色濃く残っていると感慨、細やかな筆致で活写して〝やまぐちの昭和〟をセピアの風景に閉じ込めた。文学作品として興味深いばかりでなく、生活文化史としても意義深い。

永松は、昭和二十四年（一九四九）、熊本女子大学（現・熊本県立大学）の英文学教授に迎えられた。以後も同人仲間と交わりつつ研究と作家活動を続けた。昭和四十四年（一九六九）に退官した後も、北九州大学や梅光女学院大学の教授を務めた。

永松は私小説家だが、評論や随筆にも健筆をふるった。が、なんと言っても〝ユリシーズ〟に代表される英文学の翻訳・研究者としての位置が高いといえよう。同時代を生きた評論家高見順は「昭和前期のプロレタリア派と芸術派が入り混じったカオスの時代、永松は芸術派を外さなかった」と永松の時代に流されず、ぶれない創作姿勢を評価している。

昭和六十年（一九八五）二月七日逝去。

（文・髙木正熙）

旧制萩中学校（昭和15年）

旧制山口中学校（昭和15年）